

# メディア変容と〈マス・リテラシー〉 ——〈公共性〉への問いの前梯として——

張 江 洋 直

## はじめに

近年のメディア研究には、たんにメディアについての研究といった位相に留まらない、たとえば自我や身体性、コミュニケーション、メディアといった従来は比較的自明視されてきた社会(科)学にとっての基礎的な概念そのものを問い返そうとする、より本源的な問いの方向性がみられる(1)。これには二つの理由が考えられるかもしれない。その一つはメディア研究の固有性とでもいえるべきものであり、他方は、現在進行しつつある社会変動に深く関わっている。前者は、たとえばメディア研究の先駆者の重要な一人であるM.マクルーハンが謂わば〈メディア史観〉を呈示したように、そもそもメディア研究にはそうした人間・社会あるいは歴史への総体的な把握を志向するパースペクティブが胎胚しているとする理解の仕方である。しかし、かれの議論そのものがテレビに典型化される〈電気メディア〉の大衆化を契機とした社会変動の予兆に触発されたと考えるのであれば、メディア研究の理論的な深化の傾向はすぐれて後者との関連において考察されなければならないことになる。その詮議はともかくとして、今日、私たちがメディア変容を原基とする基底的かつ大規模な社会変動過程を生きていることはたしかにいうことだろう。だが、〈こうした社会変動はどのように構想されるのか〉という問いの前で、私たちは少なからず逡巡してしまうのも事実ではあるまいか。というのも、市井に氾濫している社会変動の予兆に関わるさまざまな言説の多くは、謂わば進歩史観の変種である「技術決定論」にすぎないからである。あえていえば、国民的人気といえる「ドラえもん」がそうであると同様の意味において、それは皮相なものにすぎない。そうであるにも拘わらず、「技術決定論」はなぜ跋扈しているのだろうか。本稿ではこうした問いの方向性のなかから、さらに基底的な社会変動の〈確信〉を抱えつつ現在において、私たちが焦点化しなければならない問いの場所として〈マス・リテラシー〉という新たな概念を呈示したいとおもう。それは、本稿の副題に呈示したように、〈公共性〉を問題にするための重要な通路になるとおもわれるからでもある。

## 1. メディア研究の深化——問題の所在

今日、私たちがメディア変容を原基とする基底的かつ大規模な社会変動過程を生きている。近年におけるメディア研究において、こうした時代認識はそこに異論をはさむ余地がないといえるほどに一般化しているといつてよいだろう。だが、こうした了解は、かつてそれが「情報(化)社会論」として語りだされた1960年代末から1970年代の論議においても(2)、そのように理解されていたわけではない。そこには、決定的な〈断裂〉が存在する。私たちはそれを、若林幹夫に倣って「ニュー・メディア論」から「メディア論」への転換という「いささか逆転した言い方」で述語化しておきたいとおもう(若林[1993:46])。

とはいえ、この表現は通常の語感からするとたしかに「いささか逆転した言い方」であるだけでなく、むしろ奇異ですらあるようにおもえる。だが、やはりそこにはこう語るほかにない一つの必然性を見ることが出来る。その事情を水越伸は端的に示している。

メディア論は、もともとメディア原論のようなものがあって、その上でマス・メディア論、ニューメディア論などが展開されたのではなかったという点に留意しておく必要がある。社会の中でのメディアの具体的な変化が、人々にメディア論的な関心を引き起こしてきたのである。  
(吉見・水越[1997:175])

この指摘そのものは正鵠を射ているといわなければならないだろう。「メディア論」にあって、たしかに、その「原論」は未だ不成立であるし(3)、その理由も比較的はっきりしているのだから。というのも、そもそも「メディア論は新しい領域」であり、「メディアがそれ自体として対象化され、批判的検討をなされるようになってから、せいぜい10年程度しかたっていない」(水越[1993:58])のである。しかし、たとえ事実的な経緯がそうであるにせよ、メディア研究における理論的な転換軸の成立をそうした事実性にのみ還元するだけでは不十分ではあるまいか。なぜなら、現在の問われているのは、メディア研究そのものの理論的な地平あるいは理論的な重層性であるからだ。この点を明確化しつつ、さらに、私たちが問わなければならない領域である〈マス・リテラシー〉を確認するためにも、ここで「メディア」という言辞の用法の史的変遷に着目してみたいとおもう。

たとえば、「ニュー・メディア論」にあって「ニュー・メディア」とは、「電子メディア」の謂いである。だが、なぜそれに「ニュー・メディア」という言辞が当てられたのだろうか。この点を手がかりにしてみよう。それは、むしろ「電子メディア」がそれまでの「メディア」とは異なる「新しいメディア＝ニュー・メディア」として認知されたからであろう。では、それまでの「メディア」とは、なんなのだろうか。周知のように、「情報(化)社会論」が語りはじめられた当時において、より正確には、むしろそれ以前からじつに長きにわたり「メディア」という言辞は、明らかに「マス・メディア」の記号論的な有徴として用いられてきたのではあるまいか。「メディア」という言辞に「電子メディア」としての意味あいがいより多く含まれるようになって今日においてさえも、その残滓はまだまだ多くみられるはずである(4)。こうした「メディア」という言辞をめぐる「マス・メディア」から「電子メディア」への記号論的な有徴化の転換は、比較的若い世代ですでに過去完了時制の事柄に属しているといつてよい。だが、ここで留意したいのは、「マス・メディア」という記号論的な有徴化が支配的であったという事実性ではなく、こうした転換が生じることそのものである。

端的に言って、こうした変化は基底的には「マス・リテラシー」(藤村[1998:118])に対応しているということができる。あるいはこれを、〈時代を代表すると人びとに信憑される〉テクノロジーや文化装置がそれぞれの地平において記号論的な有徴として機能するといつても同じことである[この点は後に詳説する]。周知のように、現代のマス・メディアの中心は「放送」であり、それが「メディア」の記号論的な有徴を形成しえた時代において、メディア変容あるいはそれに

伴った社会変動は、謂わば〈知識人や技術者による予見＝予兆〉としての位置づけを与えられたにすぎないのである。少なくとも、〈マス・リテラシー〉との関連においては、そういわなければならないだろう。しかし、それは先にみたような、今日におけるメディア変容と社会変動に関する了解と等価ではない。それらは似て非なるものである。ここで留意しなければならないのは、「ニュー・メディア論」という〈予兆〉の形象化が、一見するのとは逆に、たとえば時期尚早とか先駆あるいは時代性の成熟とかいった仕方で語られる問題系に直截に関わるだけではないという点である。なぜなら、「ニュー・メディア論」に典型化される言説傾向は、今日でもひろくみることができるものだからである。つまり、ここで結論を簡略に語れば、そこにみられる差異は〈メディアと社会との相互規定的関係〉という問題系へのパースペクティブそのものの準位に対応しているのである。もしもメディアの社会的動向の自己意識がメディア研究であるとすれば、ここにみられる差異が決定的な分水嶺を形成するとみることができる。若林による「ニュー・メディア論」から「メディア論」への転換という定式は、たしかに事實的・歴史的な記述に重ねられてはいる。しかし、それはこうしたメディア研究の議論準位を決定的に劃す、謂わば理念型の準位における推移ないしは転換として理解することができるのである。

さて、「ニュー・メディア論」は1970年代から1980年代中葉の時期に当たる。そこでは、「電子的な情報通信技術の高度化と社会の関係をめぐる議論……の焦点は……新しい電子情報通信メディアが社会にもたらすであろう新たな便益をめぐる未来像の構築に据えられていた」（若林[1993:46]）という。そうであれば、「ニュー・メディア論」とは謂わば未来学的なベクトルのなかにおいて語られてきた社会変動の〈予兆〉とあってよいだろう。しかし、より本質的な問題は「ニュー・メディア論」の特質が「メディアを使う人間の主体性や身体性、そこに生じる社会的な意味や感覚に関しては比較的不変的な同一性を想定していた」（若林[1993:46]）点にある。いい換えれば、「メディアを使う人間の主体性や身体性」などが等閑視されたままに語られる社会変動とは、なんと浅薄なイメージなのだろうか。

とはいえ、私たちはここで社会変動をめぐり、そのイメージの周到さの如何を問いたいのではない。そうではなく、こうした悲惨ともいえる〈浅薄なイメージ〉がそれとして浮上してこない、それらを支える地平的な了解に止目したいのである。私たちは、それを黒崎政男に倣って「技術決定論と社会決定論の問題」（黒崎[1999:19]）と呼ぶことにしよう。

## 2. 〈透明であることへの憧れ〉——技術決定論と社会決定論の問題

黒崎は「技術が社会を変える、は本当か」（黒崎[1999:18]）という簡素な問いを呈示して、「技術決定論」の問題性について考えている。とはいえ、こうした問いは、むろんかれだけのものではない。水越はメディア研究に付随する問題点として同様の危惧を示している。

メディア論は最初の段階では、どうしても技術決定論、メディア決定論的な傾向を持つ……。新しいメディアの登場に触発された議論である以上、どうしても情報技術やメディアが中心となり、社会や人間に否応のないインパクトを与えていくという考え方が取られ、人間や社

会の側からメディアをとらえていく視点がおろそかにされがちとなる。

(吉見・水越[1997:175])

周知のようにマクルーハンは、その主著の一つである『メディア論』に「人間の拡張の諸相」という副題を附している (McLuhan[1964=1987])。そこにみられる基底的な論点は明瞭である。それを一言で〈歴史過程の重層性〉と表わすことができる。「いかなる技術も徐々に完全に新しい人間環境を生み出すものである……。環境は受動的な包装ではなくて、能動的な過程である (McLuhan[1964=1987:ii])。こうした論点は、たんにメディア研究の準位においてだけでなく、よりひろく人間ないしは社会や歴史などの多様な問題群を考えていくさいにも非常に重要であるだろう。たとえば、今日、地球規模で問題とされている環境問題などでは、場合によっては環境 (概念) がいつのまにか〈自然なるもの〉へとすり換えられて、そこへ〈人間なるもの〉や〈産業なるもの〉などを対置するといった、謂わば魔術的な思考すら散見されるようにおもわれる。こうした思考の型は、なにも環境問題に限られたことではないのだが、要は主題 (である環境) を静態的に捉えることによって〈環境なるもの〉という形而上学的概念を構成してしまい、そのことによって、かえって (環境) 問題の本質的な契機そのものを忘却してしまっているといわなければならないだろう。なぜならば、環境とはそもそも〈だれにとってのものか〉という関係の第一次性を基底的に内包せずには成立不能なものだからである。私たちはこの観点から、生態心理学のJ.J.ギブソンとともに、「生命がまだ地球上に現われなかった数百万年以前には、実際のところ地表は環境とはいえなかった」 (Gibson[1979=1985:8]) といいきらなければならないのかもしれない。

このようにマクルーハンの議論は、〈歴史過程の重層性〉を現在へと凝縮化させる動的な視点を懐胎している。とはいえ、かれの議論はその標榜する動態性とは逆に、むしろ結果的には静態的であるといわなければならない。なぜだろうか。それは、かれの議論がまさに「技術決定論」そのものだからである。周知のように、マクルーハンにとって「メディア」とは「われわれ自身の拡張したもののこと」であり、「われわれ自身の個々の拡張」とは「新しい技術のこと」 (McLuhan[1964=1987:7]) の謂いである。それゆえ、たとえば「衣服は皮膚の拡張であり」 (McLuhan[1964=1987:120])、「機械化」とは「人間の外なる自然あるいは人間の内なる本性を、増幅させ特殊化した形式に移し変えたものに他ならない」 (McLuhan[1964=1987:59])。簡略化すれば、マクルーハンの「メディア論は、メディアの技術的な変化がそのまま人間自体を変化させるという発想」であり、「道具が手の延長であるように、活字メディアも電子メディアも、人間の延長だという」 (小阪[2000:31]) ことになるだろう。一見すると、この驚くべき単純な原理は、歴史や社会変動といった複雑な過程を動的に把握するにはかえって有効であるとおもわれるかもしれない。しかし、かれの〈メディアを視点とした議論〉はじつに重要ではあるのだが、とはいえ、そこでは、世界を〈意味のテキスト〉として生きるほかにない人間的経験の基底相における問題系が完全に等閑に附されているといわなければならないだろう。たとえば、「われわれ自身の個々の拡張」である「新しい技術」は、それとして〈そこに一在る〉のではない。それは、あくまでも身体をもった個々人によってそれぞれに〈生きられる〉という仕方においてしか、この

社会的世界に存立する場所を有しないのである。それゆえ、私たちは、「技術決定論」は世界と人間的生をともに萎縮させるといわなければならないだろう(5)。

「新たな技術革新は、時代を大きく変化させる」。しばしば耳にするフレーズである。しかし、私たちはここでまず立ち止まって考えてみなければならない。なにか新しいテクノロジーが開発されると、それは必ず社会に定着し、社会を変化させる、という発想は、本当に正しいのだろうか？ (黒崎[1999:18])

黒崎は、佐藤俊樹による「技術決定論」批判(佐藤[1996])を手がかりとしつつ、「技術決定論と社会決定論の問題は、メディアの問題を考えるにあたって、まず最初に十分検討されなければならない」(黒崎[1999:19])という。前者は「社会の動きを変えていくのは技術なのだという発想」(黒崎[1999:18])を指し、後者は「社会のしくみのほうが、技術の使い方を決定すると考える立場」(黒崎[1999:19])を意味する。はじめに、黒崎の結論を確認しておこう。かれは、これら二つの議論の構造的な類似性を問題にする。つまり、両者は「おそらく同じ欠陥を有している……。それは、両者とも最初に社会と技術をそれぞれ独立の項として捉えて、そのあとで優劣関係・影響関係を論じるという構造になっている点である」(黒崎[1999:27])。後論との関係上、ここで黒崎の「技術予測」(黒崎[1999:20])に関する解題的な作業を一瞥しておきたいとおもう。かれはそれを「技術実現予測」と「技術普及予測」とに分離する。前者は「技術そのものについての予測である」(黒崎[1999:21])り、それゆえ、それがただちに社会過程に関与するのではない。留意すべきは後者である。

例えば、この技術がいくらまで安価になればこの程度普及する……といった言説は、あたかも技術について予測しているように見えて、じつは、人々の欲望や購買行動は変わらないから、このくらい安くなれば買うだろうということを前提にしている。つまり、技術普及予測は技術の予測をしているように見えて、じつは……社会の構造が変わらないとか、社会の構造がこのように変わっていくということの認識がなければ……不可能なのである。(黒崎[1999:21])

ここにおいて、「技術決定論」の理論的な欠陥が顕になる。というのも、〈社会の動きを変えていくのは技術である〉という、その基礎命題はここで自らを裏切るからである。いい換えれば、「技術普及予測」をなんら想定できない、あるいは逆に想定しなくても済むような「技術決定論」は成立不能である。なぜなら、〈社会の動きを変えていく〉ためには、その技術は必ず〈普及〉しなければならないからである。秘儀的な技術がそのままの社会的な存立様態であるかぎり、それに〈社会の動きを変えていく〉可能性はない。

ところで、他方の「社会決定論」の問題性とはなんなのだろうか。端的に言って、この思潮の存在意義は、時代の寵児たる「技術決定論」への対抗にある。とはいえ、厳密に言えば、「社会決定論」はそもそも自家撞着に帰結する宿命にある。なぜなら、それは自らが現われる文脈であ

る〈社会変動の予兆〉と齟齬を来たすからだ(6)。それゆえ、黒崎は「社会決定論」に寄り添いながらも、「技術の社会性」と「社会の技術性」(黒崎[1999:26])に着目することによって、その難点を超克しようとしている。

技術が無関係に社会から独立していて、勝手に技術開発が行なわれるわけではない。しかし、逆に、社会機構が最初にありきかという、そのときどきの社会機構もさまざまなテクノロジーの集積によって初めて成立しているのであり、テクノロジーから離れて社会機構そのものが独立して存在しているわけではない。[中略]……まず議論の出発点として確認しておかなければならないことは、技術と社会の重層的な構造、内的連関を見定めることである。

(黒崎[1999:27-29])

ここで黒崎が示している論点はきわめて穏当なものだろう。その論理を図式化していえば、「××決定論」が示す論理機制は社会的現実の〈複雑性〉に対応できない単純なものにすぎない。そのために、「技術の社会性」と「社会の技術性」という〈複数の記述の仕方〉が要請される。かれはこのように語っている。そうであれば、この論点をメディア美学のN.ボルツに拠りつつ明確化すれば、その理路は次のようになるはずである。

「複雑性とは全体が不透明だということだから、透明であること、明確であること、率直であることに対する憧れが至るところで生まれる」(Bolz[1997=1998:8-9])。「×××決定論」とは謂わば、こうした「憧れ」の結晶の一つであるにすぎない。それゆえ、「×××決定論」には、「そんなに簡単な話ではないのでね……」(Bolz[1997=1998:8])といった言明がただ対置されるだけなのだ。

黒崎が呈示する視点は妥当なものだといってよい。しかし、「技術の社会性」や「社会の技術性」の内包がどのようなものであるのかといった、議論の精緻化への欲求をいったん脇においてみれば、こうした指摘内容そのものは、むしろ自明ともいえる、謂わば議論の前梯的な事項に属している了解なのではあるまいか。それゆえ、したり顔で「そんなに簡単な話ではないのでね……」と眩くことで、むろん、なにかが解決されるわけではない。そこでは、ただ、「×××決定論」に体现される〈大きな物語の代替物〉になにかがしかの歯止めがかけられるだけなのだから。たしかに、現況ではそれも重要な作業ではあろう。謂わゆる進歩史観とそのさまざまなヴァリエーションが歴史の舞台から降りたかにおもわれた、そのときに、その変種でしかない「技術決定論」が時代の寵児といった相貌を示し、また、それへの異和を表明する「社会決定論」がロマンティックにも〈社会〉を主語の座に置くという実体的錯視に躊躇もなく陥っているのだから。

さて、私たちは、「技術決定論」である「ニュー・メディア論」が示す社会変動の〈浅薄なイメージ〉がそれとして浮上してこない地平的な了解を確認するために、いくつかの検討を重ねてきた。そこから語りうるのは、「技術決定論」それゆえ「社会決定論」がともに、〈大きな物語の代替物〉であり、それを基柢相で支えているのは、社会的現実の〈複雑性〉への異和、あるいは〈透明であることへの憧れ〉にほかならないということである。

だが、こうした事態が明白になったにせよ、まだ私たちは、現在進行しつつある〈メディア変

容を原基とする基底的かつ大規模な社会変動過程〉を十全に捉えうる理論的な要諦には辿り着いてはいない。そのためには、「技術の社会性」と「社会の技術性」という〈複数の記述の仕方〉に、さらにもう一つの〈記述の形式〉が加えられなければならない。

### 3. 〈マス・リテラシー〉という場所

私たちの〈マス・リテラシー〉概念は藤村正之に拠っている。そこで、まず、かれがこの概念を呈示する作業過程を一瞥することによって、この概念の本位を確認したいとおもう。かれは「中高年と情報環境の近くて遠い関係」（藤村[1998]）の結語部分で、今日の「情報環境」をめぐる社会変動過程の「ありうるオールタナティブなシナリオ」（藤村[1998]:118）を呈示する。そこで、〈マス・リテラシー〉は社会変動の要諦として位置づけられている。

マクルーハンの人間拡張の指摘をなぞるように、新たなメディア機器・情報機器の浸透が身体能力の拡張、主体の変容をもたらすという言説が一方にある。ある側面からとらえれば、それは間違いではないが、そこにはある種の属性をふまえた検討が加えられるべきだろう。……ひとつはエリートたちが活字文化を内在的に超克することで形成されるメディア・リテラシーであり、もうひとつは大衆のコンサマトリーな感覚にもとづいて形成されるメディア・リテラシーである……。メディアによる身体能力の拡張、主体の変容は意図せずエリート・リテラシーを中心にとりあげる議論となっているのだが、実際に巷で進行しているのは、年賀状作成……、テレビ・ゲームが中心となるパソコン利用といった、使える範囲で楽しく使えばいいというマス・リテラシーのレベルにとどまっているのである。……[中略]人々がメディアに適応するのではなく、マス・リテラシーに適応したメディアが生き残るのである。（藤村[1998]:118-9）

メディアや技術が多様な社会的要因の重層的な関係によって規定づけられて存立するとすれば、ここでの藤村は〈マス・リテラシー〉を焦点化するあまりに、結果としてかなり論点を単純化した乱暴な議論をしているようにみえるかもしれない。それよりは、たとえば「エレクトリック・メディア……は、情報技術の発達によって変化するだけではなく、国家や資本の編制力から、市民、あるいは大衆の想像力にいたる、複合的で重層的な社会の諸力の錯綜した結果として、今日のような姿に固定化させられてきた」（水越[1996:186-7]）と考えるのが正鵠を射ているだろう。なぜなら、こうした了解のほうがさまざまな諸力が錯綜する社会過程という実相をより適切に記述することができるからである。だが、留意しよう。「複合的で重層的な社会の諸力の錯綜した結果」……といった言説は、ややもすると社会的現実の〈複雑性〉をそれとしてただ指摘しているだけだということにもなりかねないのである。そうした場合、こうした言説に拠ることによって私たちは、あの〈透明であることへの憧れ〉へとさし戻されることになるのかもしれない。

その真偽はこの後に触れることとして、ここではまず〈技術が多様な社会的要因の重層的な関

係によって規定づけられてある」という命題が妥当であることを確認しておこう。たとえば、今日ではパーソナル・メディアとみなされている電話は、その草創期である「1880年以降、……欧米の大都市で急速に馴染みのあるものとなっていくが、それは何よりも有線ラジオ的な娯楽メディアとしてであった」（吉見・水越[1997:79-80]）。また、私たちにとってマス・メディアであるはずの「ラジオは、ラジオとは呼ばれずにワイヤレス（無線）と呼ばれていたが、このワイヤレスは音声の受信機能と同時に送信機能も備わった、まさにインタラクティブなメディア」（水越[1996:192]）であった。それが一方的な受信専用機に転じたものが「ラジオ」にほかならない。こうした事実は、あるメディアあるいは技術の社会的な存立様態がその特性とみなされる性質（技術特性）から必然的に帰着するのではないことを明示するだけでなく、それがじつに多様な社会的要因の重層的な関係によって規定づけられてあることを雄弁に語っている。しかし、この命題は、より一般的に〈ある社会現象は多様な社会的要因の重層的な関係によって規定づけられている〉と語ることに等価であろう。むしろ、この命題も真である。だが、この真なる命題の情報量は微少にすぎて、あたかも〈なにも語っていない〉に等しいといわなければならない。

こうして私たちは、〈透明性への憧れ〉を潜在的にはいつでも呼びださうな地平に佇んでいることになるだろう。このことは、社会過程の〈複雑性〉が〈透明性への憧れ〉を担保する以上、不可避といわなければならないだろう。それゆえ、私たちはすでにつねに、この〈透明性への憧れ〉が顕現化する可能態を抱えもっているといわなければならないだろう。だが、留意しよう。それは可能態にすぎないのである。いい換えれば、この〈透明であることへの憧れ〉へとさし戻される循環過程は不可避ではない。

この要点をしっかりと捉えながら、ここで先にみた「技術普及予測」の問題系へと理路を戻したいとおもう。そこにあって私たちは、技術と社会変動とが相関する議論地平にあっては、〈技術普及は社会変動が成立しうするための必要条件であること〉を確認している。これを私たちが歩む理路の前梯としつつ、ここではさらに〈技術が普及すること〉そのものについて簡略に考えてみたいとおもう。

周知のように、「普及」とは「ひろくいきわたること」あるいはそうさせることの謂いである。そこでは文脈上、〈一定の社会へとひろくいきわたること〉が含意されてあるから、それは端的に「大衆化」と同義と考えてよいだろう。では、ここでいう「技術」とはなにか。むしろ、ここでは一般的な「技術（technique）」あるいは「技能（skill）」といった意味ではなく、それは「科学技術（technology）」を指示している。「科学技術」は元来「産業革命以後、産業界に幅広く用いられるようになった科学的発明・発見を応用した工業的知識を意味する」（川喜多[1993:1038]）のだが、ここでは、そうした知識ないしはその体系そのものではなく、むしろ、それらによる〈生産物〉と考えるのが妥当だろう。それでは、再度問うことにしよう。〈科学技術による生産物が大衆化する〉とは、どのようなことだろうか。

だが、もうこれ以上に敷衍化する必要もあるまい。私たちは〈技術が普及すること〉から出立して、最終的には消費者行動の問題系に直面することになる。とはいえ、私たちはここでこの問題系そのものを論じたいのではない。また、先の黒崎の議論には「安価」ということばが使用されていることから端的に知られるのだが、かれはこうした論点を自明視している。私たちはそれ



を暗黙のうちに変換させるのではなく、〈技術が普及すること〉が必ず〈科学技術による生産物⇨工業製品の大衆化〉に転位せざるをえないことを明示的に確認したいのである。

先に私たちが引いた藤村は、「人々がメディアに適応するのではなく、マス・リテラシーに適応したメディアが生き残るのである」と断じている。これは、場合によっては誤解を生じかねないという意味で、危険な断言といえるかもしれない。というのも、どのように考えても〈マス・リテラシー〉が歴史的に不変であるとはいえないからである。むしろ、藤村もそこにこうした含意をもたせているのではあるまい。では、どのように理解すればよいのだろうか。ある時点での〈マス・リテラシー〉はそこで成立している重層的なメディアや技術の準位をその成立条件として歴史的に構成されたものであり、すでにつねにその可変性は原理的に担保されている。そうであるにせよ、その時点での〈マス・リテラシー〉が〈技術の普及〉にとって基底的な可能性の条件として成立していることもまた確かなことであろう(7)。たとえば、少なくともさまざまな家電製品をみていると、〈使える範囲で楽しく使えばいい〉という基準は〈普及〉にとっては決定的なものであることが十全に知られるだろう。さらにいえば、〈使える範囲で楽しく使えばいい〉という基準に、その「レベルにとどまっている」という藤村の表現にみられるような、ある種の遅滞や低きものといった意味あいを含ませる必要もなんらないだろう。それどころか、それは〈技術のイメージ〉とともに〈技術の普及〉にとって必要不可欠な二極の指標を形成していると考えることができる。

1950年代の「三種の神器」、あるいは最近の「情報家電」という言葉が示しているように、家電は戦後の日本人にとって自分たちの技術的な能力と経済的な成功を確認する重要な標識（シンボル）の一つでした。高度成長期を経て現在に至るまで、より高度で多種多様な家電製品を、狭い家のなかに買い揃えていくことで日本人は自己意識を形成してきました。  
(吉見[1999:45])

吉見は家電製品がシンボルであると語る。ここでいうシンボルとは、J.ボードリヤールがいう記号と同位なものである。「消費される物になるためには、物は記号にならなくてはならない」(Baudrillard[1968=1980:246])。かれにとって、「消費は関係（物に対する関係だけではなく、集団と世界とに対する関係）の能動的なあり方」(Baudrillard[1968=1980:245])を意味している。それゆえ、消費されるのは〈関係という意味〉である。こう理解することによって、人びとが消費してきた〈家電製品〉はたんなる物ではなく、むしろ〈技術のシンボル〉であることが前景化されるだろう。

〈技術の普及〉は、おそらく2つの極である〈技術のイメージ〉と〈マス・リテラシー〉との相関関係によって決定づけられていると考えることができる。たとえば、価値的に正のイメージは〈普及〉を促進するだろうし、逆の場合は阻害要因として機能するだろう。また、〈使える範囲で楽しく使えばいい〉という基準は〈促進〉の形態を決定づけるはずである。だが、問題はこのような単純ではない。というのも、〈使える範囲で楽しく使えばいい〉という基準は〈マス・リテラシー〉の重要ではあるが、やはり一つの側面をいい表わしているにすぎないからである。

なぜなら、これら2つの指標は、たんに独立した項として成立するだけでなく、それらには明確な相互規定関係があるからである。いい換えれば、これら二項は〈技術の普及〉に関する分析的な準位においてのみ、それぞれに独立したものとして現われるにすぎない。より本質的にいって、〈技術のイメージ〉を規定づけるのは〈マス・リテラシー〉である。なぜなのだろうか。その理由を明確化するために、ここで単純な問いをはじめてみよう。〈技術のイメージ〉を構想するのはだれなのだろうか。それが技術を開発する技術者であるとしよう。しかし、そのイメージは〈普及〉が問題となった時点で、どうしても〈マス・リテラシー〉と接触しなければならないだけでなく、その本質的な契機としてそれをなんらかの仕方で自らにとり込むのでなければならないだろう。こうして、たとえ製作者が描いた〈技術のイメージ〉であろうとも、それは〈マス・リテラシー〉に方向づけられて本質的な変形を被らざるをえないのである。

しかし、こうした理路は問題そのものの所在を隠蔽してしまうのかもしれない。というのも、そもそも〈技術のイメージ〉を構想するのは〈だれでもない〉からである。なぜなら、それは〈マス・イメージ〉として成立するだけだからである。だから、それは大衆的な準位で成立する「信憑性構造 (plausibility structure)」(Berger & Kellner[1981=1987:87]) において捉えられなければならない問題系なのである。

ところで、周知のように「リテラシーという考え方はもともと、読み書き能力、識字能力を意味していた」(水越[1996:182])。その転用が「メディア・リテラシー」である。水越はそこに「メディア機器使用能力」「メディア鑑賞・教授能力」「メディア活用・表現能力」という3次元の「相互作用的な関係」(水越[1996:183])をみている。私たちがここで問いたいのは、「メディア機器使用能力」「という即物的な次元に比重が置かれがちである」(吉見・水越[1997:201]) 現状への警鐘にはないし、そこから必然的に帰結する「メディア・リテラシー[教育]の目的が、人間の全体性を回復することにある」(吉見・水越[1997:201]) (8)とする教育論にもない。私たちがみるかぎり、もしもこの現状が即物的であるとすれば、それは〈マス・リテラシー〉がそうした側面を濃厚に有しているからにすぎない。また、教育が「人間の全体性を回復する」といった信憑は〈使える範囲で楽しく使えばいい〉という基準と、おそらくはどこまでいってもパラレルな関係しかもちえないだろう。

私たちにあって、いま問われているのは、こうした了解を踏まえて自らの視線の方向性を転じることなのではあるまいか。少なくとも技術やメディアが社会変動と相関するものであるとすれば、〈社会的な普及〉という問題系はより本質的な契機である。そうであれば、私たちは〈普及〉にとって基底的である〈マス・リテラシー〉がどのような構造性を有し、また、それがどのように構成されるのかを問わなければならないだろう。

では、その通路はどこにあるのだろうか。いい換えれば、〈マス・リテラシー〉という場所はどこにあるのだろうか。あるいは、「世の中の多くの事象において、主流をしめるのはマス・リテラシーである」(藤村[1998:118]) と考えるのが妥当であるとすれば、それはどこにおいて構成されるのだろうか。むろん、その答えは平易なものだ。それは〈日常生活の世界〉において構成される〈常識=共通感覚 (common-sense)〉にほかならないだろう。あるいは、その場所をより厳密に「人びとのあいだで自らの日常生活を営んでいる人の常識的な思惟によって構成される

思惟対象」(Schutz[1962:6=1983:53])ということもできる。問われなければならないのは、〈マス・リテラシー〉の構成場面である「〈常識知〉を共同性の位相において着目すること」(張江[1998:238])そのもののなかにある。

## おわりに

〈マス・リテラシー〉という場所は、たとえば大衆的な準位で成立する〈信憑性構造〉あるいは、よりひろく〈共通感覚〉において構成される。すでにみたように〈技術の社会的な普及〉が社会変動にとってより本質的な契機であるとするれば、メディア研究はこの場所を自らの一つの視点として、そこに定位するのだからなければならないだろう。これが小論のささやかな結語ではあるが、ここで最後に、〈マス・リテラシー〉の具体相を呈示して本稿を閉じたいとおもう。その重要な手がかりを、上野千鶴子が1980年代に呈示した消費社会論が与えてくれている。

私は高度成長期以降の人々の欲求性向を、「人なみ化」から「差別化」へと定式化した。両者の関係は二段階のものと言うより、表裏一体に進行すると言ってよい。／人々は「人とちがう」ことをのぞみながら、同時に「ちがいがわかる」限りで「人と同じ」であることを望んでいる。  
(上野[1982:107])

ここで語られている「人なみ化」という性向は重層的な概念である点に十分な留意が必要である。一方では、それはたしかに高度経済成長期あるいは「大衆社会の欲望の構造」(上野[1982:107])を端的に示しているだろう。だが、この概念はそれだけの含意ではない。もしもそれだけであるならば、おそらくそれは、D.リースマンの「他者志向」と基本的に変わるところがないのだから。むしろ私たちが着目したいのは、それが「人なみ水準」(上野[1982:99])という了解をその基柢相において有している点にある。いい換えれば、これが「人なみ化」と「差別化」が「表裏一体に進行する」という上野の消費社会論の中心を可能としているということが出来る。

畜肉消費が常態化した社会で畜肉の供給をへらせばパニックに陥ることは、軍政下のポーランドに見るとおりだ。食というサヴァイヴアルの根本でも、人々は社会によって「人なみ」水準へと強制される。[中略]「健康で文化的な最低限の生活」は、つねに「人なみ」水準ではかられる。必要からくるミニマム論議は、いつも泥沼に陥るほかない。  
(上野[1982:102])

私たちが本稿で留意を喚起してきた〈マス・リテラシー〉の基柢相は、上野がいう「人なみ水準」と明確に対応している。おそらく、一定の社会・時代には、必ずその後の事態を左右する大衆的な分水嶺が構成されるのだ。藤村がいうように、「世の中の多くの事象において、主流をしめるのはマス・リテラシーである」(藤村[1998:118])とすれば、人びとが「人なみ」と〈信憑する〉準位の推移を注視するのでなければ、私たちはいつでもまた、しかも気づかぬうちに〈透明であることへの憧れ〉に絡めとられてしまうのではないだろうか。いい換えれば、こうした視点を等閑に附したままに語られるあらゆる社会変動に関する言説は、かつてプラトンがそう断じたように、すべて〈オトギ話〉といわなければならないだろう。

ところで、資本制社会において流通するものになるためには、記号は必ず〈商品〉にならないのだから。もしもその社会が市場原理にすべて被い尽くされているのであれば、この問いには肯定的な答えを返すほかはないのかもしれない。だが、岩井克人がいう〈不均衡動学〉が示すように、「『経済』問題の根源を探っていくと……『経済外的』要因がとぐろをまいているのに出くわす」(岩井[1985:150]) のであるとすれば、むしろ、その答えもまったく異なるだろう。じっさい、私たちの社会にあって、ありとあらゆるものが商品化されることはない(9)。

最後にこうした問題系をあえて呈示したのは、〈技術の普及〉の問題系を〈公共性〉と連関させながら考えたいからである。すでに私たちは、〈技術が普及すること〉が必ず〈科学技術による生産物≒工業製品の大衆化〉に転位せざるをえないことを確認している。ここで喚起したいのは、少々唐突に感じられるかもしれないが、〈非商品〉である「オープン・ソース (open source)」と呼ばれる一連のコンピュータ・プログラム群とその歴史的な系譜である。というのも、私たちがみるかぎり Linux や Apache といった「オープン・ソース」が現在まで連綿とたたえ続けている〈公共性に関わる思想地平〉と〈マス・リテラシー〉との相関のなかに、現在の構想しうる〈新たな公共性〉の存在様態が浮上してくるようにおもえるからである。

「オープンソースの定義 日本語版 (バージョン1.7)」によれば、「オープンソース」とは、ソースコードがたんに入手できるということだけを意味するのではなく、「オープンソース」であるプログラムの次のような配布条件の基準が満たされていなければならないという。それは「再配布の自由」からはじまり、「ソースコード」「派生ソフトウェア」「作者のソースコードの完全性」「個人やグループに対する差別の禁止」「使用する分野に対する差別の禁止」「ライセンスの分散」「特定製品でのみ有効なライセンスの禁止」「他のソフトウェアに干渉するライセンスの禁止」という9項目にわたっている。そこに端的に現われているのは、公開性や公平性に貫かれた徹底した〈公共性〉の思想であるといつてよい。それをさらに十全に理解するために、そこで想定されている「オープン・ソース・コミュニティ」という〈公共圏〉がどのようなものであるのかを、「オープン・ソース」の歴史過程からみると逆説的ではあるのだが、IBM Japan のホーム・ページ上でIBMが「Transarc の開発による自社の著名な製品、A F S のオープン・ソース化を発表」した「理由」を一瞥することによって確認してみたいとおもう。

IBMが望んでいるのは、A F S をオープン化することにより、技術革新がスピードアップし、エンタープライズ・ファイル共有の領域でのユーザー同士の協力が容易になることです。いったんコードがオープン化されるなら、クライアントは行われている様々なプロジェクトを合同で作業できるようになります。プロジェクトの多くは、そうした協力から多大の益を受けることでしょう。  
(Maya Stodte[2000])

ここで私たちは「ユーザー」という名辞で想定されているさまざまなプログラマーたちをどのような社会的位相において理解すればよいのだろうか。かれらをただちにエリートと呼びうるかどうかはともかく、少なくとも、かれらが〈マス・リテラシー〉とは明らかに隔絶した存在であることだけはまちがいあるまい(10)。おそらくこれは、社会教育の歴史が示してくれているように、〈メデイ

ア・リテラシー教育〉の問題群に解消されえないものだろう。というのも、「オープン・ソース・コミュニティ」という〈公共圏〉は〈マス・リテラシー〉とは決して交わらないからである。そうであるとすれば、私たちは〈新たな公共性〉を「オープン・ソース・コミュニティ」という〈公共圏〉の延長線においてではなく、むしろそうした〈ネット・コミュニティ〉とは無縁であり続けている〈マス・リテラシー〉との相関のなかにおいて志向していかなければならないだろう。

## 註

- (1) この点に関しては拙稿（張江[1999a]）、とくに註(2)を参照願いたい。
- (2) 村上陽一郎によれば、「情報化社会や情報社会という概念は、日本から生まれた」（村上[1999:136]）ものであり、また、その経緯を簡略に紹介している。なお、「情報（化）社会論」の典型としてはD.ベル（Bell[1974=1975]）をあげることができる。
- (3) こういったからといって、私たちとしてはメディア研究に「原論」が必要不可欠であると考えているわけではない。むしろメディア研究にとって必要なのは、なんらかの〈原理〉を明確に措定することではなく、現況でさまざまに遂行されている諸研究を吟味しつつ、それらを〈経験の構造性の準位から基礎づけていくこと〉であろう。ちなみに、私たちにとって〈基礎づけ〉とは構成しうる究極の出発点を希求することを意味しない。周知のように、そうした理論性向はすでに前世紀の中葉でその命脈を絶たれているといつてよい。すでにO.F.ボルノーが明示しているように（Bollnow[1970=1975]）、むしろ私たちは謂わゆる「アルキメデスの点」が不在であるという了解から出立するのでなければならぬだろう。
- (4) P.ブルデューの『メディア批判』（Bourdieu[1996=2000]）という翻訳書のタイトルは、こうした残滓の典型とみることができる。「訳者解説」にも明記されているが、この原題は「テレビジョンについて」である。内容面から考えると、それはたしかにテレビジョンに限定されるものではない。しかし、そうだからといって、それをただちに「メディア批判」という仕方に〈変形〉することが可能である根拠はないだろう。もしもそれが可能であるとするれば、それは「メディア」という言辞が「テレビジョン」つまり「放送」を中軸とした「マス・メディア」の記号論的な有徴として機能しているという事実性への依拠以外には考えられないだろう。
- (5) この点に関しては拙稿（張江[1999a][2000a]）を、またそこへと向かう社会(科)学方法論に関しては拙稿（張江[2000b]）を参照願いたい。
- (6) これら両者の関係を理解するには、「絶対主義」と「相対主義」との関係を想起されるのが便宜であろう。
- (7) マス・リテラシー〉がもつ歴史性に関する、こうした循環関係は、たとえば経験的に構成される〈経験のストック〉が体験作用にとって、その本性からいって超越論的であるという構構性と同等とみることができる。この点に関しては拙稿（張江[1999b]）を参照願いたい。

- (8) 吉見・水越の引用には本来はないのだが、文脈から考えて、あえて「[]」を附して「教育」を補填してある。
- (9) 岩井によれば、「ありとあらゆるものが商品化され、すべての価格が自由にかつ分権的に決定されるような経済とは、人々の貨幣の保有が可能にする総需要と総供給とのあいだの不均衡のほんのわずかの実現にたいしても、ハイパー・インフレーションや恐慌といった累積的不均衡過程を発生させてしまうひどく不安定的いや非合理的な性質をもっている」(岩井[1985:144])という。
- (10) 吉田純は本来のハッカー (hacker) の意味を「コンピュータをハードウェア的・ソフトウェア的に自由自在に“hackし(切り刻み)」、新しいハードウェアやソフトウェアを開発できるような高度な技術的能力を備えたユーザー」(吉田[2000:32])と明確に定義したうえで、そうした「ハッカー文化のある意味でエリート主義的な原則」(吉田[2000:41-2])を指摘している。そこで問題となる分岐点は「インターネットの大衆化」(吉田[2000:41])である。

## 参考文献

- Baudrillard, J. [1968] *Le systeme des objets*, Editions Gallimard.= [1980] 宇波彰訳『物の体系』法政大学出版局
- Bell, D. [1974] *The Coming of Post-Industrial Society*. = [1975] 内田忠夫ほか訳『脱工業化社会の到来』上・下、ダイヤモンド社
- Berber, P. L. & H. Kellner [1981] *Sociology Reinterpreted*, Anchor Press. = [1987] 森下伸也訳『社会学再考』新曜社
- Bollnow, O.F. [1970] *Philosophie der Erkenntnis*, V. W. Kohlhammer. = [1975] 西村皓・井上担訳『認識の哲学』理想社
- Bolz, N. [1997] *Die Sinngesellschaft*, Econ Verlag. = [1998] 村上淳一訳『意味に飢える社会』東京大学出版会
- Bourdieu, P. [1996] *Sur la television*, LIBER editions. = [2000] 櫻本陽一訳『メディア批判』藤原書店
- 藤村正之 [1998] 「中高年と情報環境の近くて遠い関係」栗原孝ほか共著『情報文化と生活世界』福村出版
- 張江洋直 [1998] 「『情報文化』における〈歴史的現在〉と近代性」現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』第8号、人間の科学社
- 張江洋直 [1999a] 「経験とメディア」『稚内北星学園短期大学紀要』第12号
- 張江洋直 [1999b] 「超越論的概念としての〈経験のストック〉」現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』第9号、人間の科学新社
- 張江洋直 [2000a] 「リアリティとメディア」丸山不二夫編『情報メディア論』八千代出版
- 張江洋直 [2000b] 「A. シュッツと〈現在〉」現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』第10号、人間の科学新社
- 岩井克人 [1985] 『ヴェニス商人の資本論』筑摩書房

- 川喜多喬 [1993] 「テクノロジー」 森岡清美・塩原勉・本間泰平編集代表『新社会学辞典』有斐閣
- 小阪修平 [2000] 『現代社会のゆくえ』彩流社
- 黒崎政男 [1999] 「メディアの受容と変容」黒崎ほか共著『情報の空間学』N T T出版
- 中村文哉 [2000] 「情報化社会における社会的現実の変貌」井上純一・林弥富編『世紀の転換と社会学』法律文化社
- McLuhan, M. [1964] *Understanding Media*, McGraw-Hill.=栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房
- 丸山不二夫 [2000] 「メディアの現在とメディア統合」『情報メディア論』所収
- 水越伸 [1993] 「メディア論の混沌」『情況』1993年7月号、情況出版
- 水越伸 [1996] 「情報化とメディアの可能的様態の行方」吉見俊哉編『メディアと情報化の社会学』（『岩波講座 現代社会学』第22巻）岩波書店
- 村上陽一郎 [1999] 「日本社会と情報化」『情報の空間学』所収
- 大澤真幸 [1999] 「電子メディアの共同体」吉見俊哉ほか共著『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社
- Perens, B. [1997] *The Open Source Definition (Version 1.7)*. =[1997] (訳者不明) 「オープンソースの定義 日本語版 (バージョン1.7)」  
<http://www.opensource.org/osd.html>  
<http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-PaloAlto/9803/osd-ja/osd-ja.html>
- 佐藤俊樹 [1996] 『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社
- Schutz, A. [1962] *Collected Papers I*, Nijhoff.= [1983・1985] 渡部光・那須壽・西原和久訳『社会的現実の問題』1・2巻、マルジュ社
- Stodte, M. [2000] 「A F S のオープン化——独自開発の製品がまた1つオープン・ソース・コミュニティへ」(訳者不明)  
[http://www.ibm.co.jp/developerworks/opensource/010119/j\\_os-afs.html](http://www.ibm.co.jp/developerworks/opensource/010119/j_os-afs.html)
- 上野千鶴子 [1982] 「商品」『現代思想』vol.10-7. 青土社
- 若林幹夫 [1993] 「メディアと社会変容」『情況』1993年7月号、情況出版
- 吉田純 [2000] 『インターネット空間の社会学』世界思想社
- 吉見俊哉 [1999a] 「家電イメージの政治学」『情報の空間学』所収
- 吉見俊哉 [1999b] 「グローバル化と文化研究の視座」『メディア空間の変容と多文化社会』所収
- 吉見俊哉・水越伸 [1997] 『メディア論』放送大学教育振興会